

飛び級で中学入学

一八八二(明治一五)年一色学校に入学し、四年後に八年の課程を飛び級で卒業した。卒業後は岐阜中学に入学したが、自宅からの通学は無理なため、岐阜に下宿、その後寄宿舎に移った。同級生は一五、六歳であつたが、貞治はまだ一一歳であつた。エッセイ「中学時代のこと」(『岐阜県教育史 通史編 近代一』)にある、高木貞治の体験談によると、岐阜中学で使用されたテキストはいわゆる「原書」で、バーレーの万国史、スウィントンの万国史、ロスコの無機化学、スチュワートの物理など外国語の書物がそのままテキストとして用いられた。外国語は英語とドイツ語を学んだ。

今と違い、当時中学に進学するのはほんの一部だったとはいえ、一一歳の頃から原書で学ぶというのはいかにもエリートである。



高木貞治の卒業証書 岐阜新聞社提供

三高から帝大数学科へ

一八九一（明治二四）年九月、京都第三高等学校に入学した。三高では、数学者河合十太郎に数学を教わり、大きな影響を受けた。生涯の友となる広島出身の吉江琢兒と出会う。吉江はその後帝大の数学科と一緒に入学、洋行もほぼ同時期、帰朝後はともに、東大に奉職している。

帝大時代の高木の学びを示すノートが現存している。一八九二年の河合十太郎による三角法の講義を高木が記録した英文の講義ノートで、本巢市「高木貞治博士記念室」に保管されている。タイトルに「Elementary Trigonometry」とある。河合はトドハンターの英文の著作をテキストに使用した。

一八九四年七月、三高を卒業。同年九月帝国大学入学。所属先は数学科。菊池大麓、藤澤利喜太郎、長岡半太郎らに数学を学ぶ。吉江の講義ノート（東大所蔵）によると、二人が受けたと推察できる講義内容は、幾何学、微積分、関数論、確率論、力学、カリキュラス（解析学）等である。菊池も藤澤も講義は英語、学生も英語でノートを取った。高木のエッセイ「日本の数学」と藤澤博士」（『教育』第三巻第八号及び『藤澤博士追想録』再

録）によると、藤澤が洋行から多くの西洋数学を持ち帰ったことは、「日本の数学にとってこれは重大で、将来編まらるべき新日本数学史上の一つの契機であらねばならない」ほどの画期的な事柄であった。（高瀬、岩波新書八四頁参照）。

三年目より、「藤澤セミナー」開始。これは、藤澤が学生に課題を与え調査研究を奨励するもので、これが高木の数学研究に及ぼした影響は非常に大きい。この演習の記録『藤澤教授セミナー演習録』東京数学物理学会編纂委員編纂（明治二九年―三三年）によると、高木の論説は「アーベル方程式につきて」（明治三〇年刊行演習録第二冊収録）である。これは高木の類体論研究の契機になった重要な論文である。

一八九七（明治三〇）年七月卒業後、大学院進学。翌年六月二二日洋行のため退学した。

「回顧と展望」（『近世数学史談』岩波文庫（一九八一―二四頁））によると、当時数学科の学風は相当自由で、本はなんでもいいから勝手に読めといわれたので、図書館にあるいろいろな本を乱読したようだ。

洋行から帝大教授へ

一八九八(明治三二)年八月、横浜出港。一〇月ベルリン到着。

当時については高木自身の回想記「回顧と展望」(二〇一一—二〇三頁)に記されている。それによると当時は西洋の学者を神様のように思っている時代だったので、ベルリンへは怖気をもつて行った。が、実際に講義を聴講してみるとそれほど恐れるような内容でもなかったようだ。日本人を軽蔑しているというフェルディナント・ゲオルク・フロベニウスにある問題について聞きにいったところ、それは面白い、自分で考えなさいと言われた。この自分で考えるという視点は従来の貞治にはなく、とても新鮮であったようだ。

一九〇〇(明治三三)年ゲッチンゲンに移る。近代数学の父といわれるドイツの数学者ダフィット・ヒルベルトと会う。ゲッチンゲン大学にてヒルベルトの講義を聴講。当時のゲッチンゲンは数学世界の中心ともいえる場所、ベルリンとは大違い、日本の数学は五〇年遅れていると痛感した。ヒルベルトに「お前は代数体の整数論をやるといつか、本当にやる積りか」と問われ、「やる積りです」と答えたこと。路上でヒルベルトがステ

ツキで正方形と円を描き、関数を正方形と円で示したこと等ヒルベルトとの逸話について「回顧と展望」(二〇三—二〇五頁)に記載されている。

一九〇〇年洋行中の六月二四日付、東京帝国大学理科大学助教授。翌年一二月四日帰朝し、第三講座代数学を担当する。一九〇三年五月二日付、東京帝国大学理科大学教授に就任。一九三二(昭和七)年第一講座、微分積分学講義を担当する。一九三六年三月定年退官。一九四〇年、文化勲章受章。

さかのぼって、一九〇二年四月六日、結婚。東京府東京市本郷区駒込曙町二四番地に住む。



東大教授時代の高木貞治 岐阜新聞社提供

東京での暮らしぶり

生前の貞治を知る高橋佳子^{よしこ}さんに話を聞いた。佳子さんの実母が高木貞治の姪にあたる。佳子さんの母は、高木貞治の弟安吉の娘である。佳子さんは貞治の姪の娘、姪孫^{ていそん}である。

母の旧姓は高木、結婚して曾我部家に入った。結婚後の住まいは東京日本橋である。嫁いで上京し心細いときも、博士が大丈夫だと言ってくれた。博士は、たった一人の姪が東京に引っ越してきたので、とても大事にしていた。ひと月に一回はいろいろしやいと言われた。

佳子さんは日本橋生まれ、私立千代田小学校に通う。子供の頃から母に連れられ、高木貞治の家に毎月通う。当時の高木貞治は本郷に在住。子供は八人。立派なお屋敷に住んでおり、広い庭があつて、とても裕福な暮らしをしているという印象を持った。一張羅を着せられ、お行儀よくしなさいといわれて高木家を訪問した。訪問すると、

博士は、「よう来たねえ、ゆつくりしていきなさい」と穏やかな声でおっしゃった。とても、穏やかなお人柄だったと記憶している。

奥様はしゃきしゃきした、気の利く方。このひとはこれをさしあげると、訪問客に合わせてどんなお土産を渡すかの確に指示を出していた。佳子さんもうかがうと必ずお土産をいだいた。佳子さんの振り袖は、高木博士の奥様が三越の正面玄関に飾つてあるものを購入してくれたものだといふ。



高木貞治・とし 岐阜新聞社提供

疎開中の暮らしぶり

戦争で東京の住居が焼けた後、博士は、一時山梨に疎開していたが、食糧難のため生活が困難であった。白いご飯ならいくらでも食べられるので数屋に來ないかと誘われ、一九四五(昭和二〇)年の一〇月に数屋に疎開した。疎開は博士と奥様の二人。ご長男とお嬢さんがときどきいらつしやつたと記憶している。

佳子さんは日本橋から曾我屋に疎開していたが、そこも焼けたので九月に数屋に移り、博士と同居した。東京で散々お世話になったので、疎開中の博士のお世話は、もっぱら佳子さんのお母さんがした。ご飯もすべてお母さんが準備した。博士は翌年の九月頃まで滞在。当時の博士は文化勲章受章後、七〇歳頃。疎開中も大きな声一つ出されたことはない。誰かと遊びに行くことはなく、朝から晩まで机にすわっていた。お酒は飲まれた。タバコもすわれた。タバコは配給制であった。

当時博士は、時々散歩に出るだけで、朝から晩まで、一日のほとんどは勉強を続けていた。

ある時、佳子さんは、第二人と三人で博士のもとを訪れ、博士はお年寄りなのにどうしてそんなに勉強されるのですかと聞いた。すると博士は三人に、そこにお座りなさいと言われ、「よく聞きなさい、人間は死ぬまで勉強です、あなたがたはこの姿勢を死ぬまで続けてください」と言われた。

月に一度東大の数学部の疎開先に出講されるときは、荷物を持って駅までお送りした。当時はどこに行くにもコメなどを持っていくかなければならなかった。弟と荷物をもって黒野の駅までお送りすると別れの際、「ありがとう、お気をつけて帰きなさい」と言われた。